3. IPW演習　報告

1）IPW演習（緩和医療学）

12月1日（金）13：30～17：05　　会場：城西大学

わが国が推進している医療、介護および福祉の領域が連携し患者などのケアを行う地域包括システムは、複数の領域の専門職者がそれぞれの技術と知識を提供し合い、相互の作用しつつ共通の目標の達成を患者・利用者とともにめざす協働した多職種連携実践（IPW）によって支えられている。IPWの発展には、複数の領域の専門職者は連携およびケアの質を改善するために、**同じ場所で共に学び、お互いから学びあいながら、お互いのことを学ぶ、多職種連携教育（IPE）**が大切である。専門職（または多職種）者は、常にIPEの姿勢や態度をもってIPWに臨める専門職の育成が臨まれるが、それぞれの職域を中心とした教育や、職能を発揮させる経緯などの要因が、専門職の連携した質の高いサービスを提供する際の障壁となることがある。

城西大学、埼玉県立大学、埼玉医科大学および日本工業大学の4大学は、異なる専門性をもった人材を輩出する教育を行っており、地域住民の暮らしを支える連携力を育成するための教育方法を開発するために「彩の国連携力育成プロジェクト(saipe)」を共同で運営している。saipeは5つの地域基盤型IPWコンピテンシーを定め、教育プログラムを3つの学びの要素に分け「彩の国連携科目」として身に付けるべきものを明示した。そのプログラムの１つであるIPW演習（緩和医療学）は、**緩和ケアを題材**に、**模擬患者に対する面談**やその内容を踏まえた**チームによる議論**によって、全人的なアプローチから**ケアプランを作成**するとともに、**多職種がチームとして活動し、乗りこえるべき課題について考える演習**である。

2024年度は、埼玉県立大学理学療法学科（3年生28 名）、埼玉医科大学医学科（3年生135 名）、城西大学薬学部（17名：薬学科４・5年生14名、医療栄養学科3年生3名）、日本工業大学大学院 建築デザイン学専攻（1名）の総勢**181名の学生**によって実際されました。

学生たちは、培った知識や技術を応用してメンバーたちと面と向かって上手にコミュニケーションを図り、模擬患者さんの病歴や治療情報、さらにはインタビューを通じて得た患者さんの生活状況や**思い**などをもとに、**患者さんに寄り添いながら**支援する方策について活発に話し合っていました。また、学生に協力を得て事前および事後のアンケート調査を実施した。この演習は、患者の思いや気持ちに寄添うこと、患者の状況を客観的に評価すること、グループ活動やコミュニケーションの実践することなどに有効であった。特に、この演習を経験することは、単独の大学の学生で構成されるメンバーよりも、**複数の大学の学生で構成されたチーム**が、**IPWに対する理解が高まる**ことを明らかにした。次年度は、単独の大学で構成された学生も高い学習効果を得るような工夫をする予定である。

チーム活動の様子

培った技術で情報を可視化する

模擬患者への面談の様子

模擬患者との面談は本物そのもの

まとめた意見を発表する様子

演習後は親睦も深まりIPWを実感